

# 夷陵への旅

——欧陽修「于役志」を読む——

岡本 不二明

〈はじめに〉

「于役志」は、北宋の著名な文人である欧陽修が、景祐三年（一〇三六年）呂夷簡と范仲淹の党争にからんで、夷陵（現在の湖北省宜昌市）に流謫された時の旅日記である。その記事は、景祐三年五月九日の范仲淹の左遷からはじまり、自らの夷陵流謫、そして都の汴京を離れ楚州・揚州を経て長江をさかのぼり、湖北の公安に到着した時点（同年九月十七日）で終わっている。

「于役志」の記事自体は、以下で紹介するようにごく簡単であり、各地での宴会や道中の見聞などの記事はほとんど備忘録に等しい。しかし、そうした簡潔な記事の羅列にもかかわらず、「于役志」が日記と旅游記という二つの性格を兼ね備えたきわめて貴重な記録であることもまた確かである。そもそも中国において日記の歴史はかなり古い、それはおおむね天子の言行を記す「日曆」「起居注」などに限られていた。だがそうした公的な記録とは別に、ある時期から個人が私的な記録として日記をつけはじめようになるが、そのもつとも古い例としては、中唐の李翱の「来南録」

があげられる。これは、洛陽から広州までの簡単な旅日記であり、日記と旅行記を兼ねている点で「于役志」の先蹤をなすものである。さらに唐末の宰相崔沆の家中の記録「崔氏日録」（散逸）があった。北宋に入ると、欧陽修の「于役志」以外に、司馬光・王安石・曾布・黄庭堅などの日記が知られる。司馬光や王安石の日記は一種の政治日記であり、とりわけ後者が神宗実録の編纂にからんで後に大きな問題呼んだことはよく知られている。新法党の曾布が書いた膨大な日記は、南宋初期にそれを見た周輝の証言によれば、「私家交際」から「嬰兒疾病」「医薬治療」まで、こまごまとした記事で埋めつくされていたという。さらに黄庭堅の宜州流謫時代の日記は、贈答品の品目、手紙の授受、散歩や面会など日常行為の淡々とした記録に終始し、備忘録というよりも家計簿に近いほどである。

一方、旅游記、紀行文の歴史という点では、古く漢代から六朝にかけて、賦の分野で紀行賦と呼ばれるジャンルが存在した。ただしそれらの作品は、あくまでも賦の特性として文学的な修辭性を優先しがちであり、「来南録」以降の散文で書かれた紀行日記とは直接にはつながらない。欧陽修の「于役志」が直接的な影響を受けたと見られるものとしては、まず李翱の「来南録」を想定すべきであろう。なぜなら、欧陽修は洛陽の西京推官時代に李翱の文集を入手し（「来南録」も収められていた）、古文運動家として名をはせた李の文体に魅せられ、さらには夷陵流謫の旅の最後に（十月十七日）その文集を読み終えた感激をつづっているのであるから。

また「于役志」の後世に対する影響、とりわけ南宋初期のすぐれた日記

紀行文（たとえば陸游「入蜀記」范成大「石湖三録」など）に対するそれは、無視できないものがある。たとえば「入蜀記」は、乾道六年七月十八日の条（於太平州）で宿泊地の考証に「于役志」を引用し、また夷陵ではみずから歐陽修の残した事跡をたずねたりしている。陸游が夷陵の少し上流の夔州まで、長江をさかのぼる入蜀の旅路を、歐陽修の旅に重ね合わせていたことは間違いない。そしてさらに陸游の成都在職中の上司であり、おそらく「入蜀記」を読んだと思われる范成大的「呉船録」も、やはり長江を下る旅路の中で歐陽修の事跡に触れている。これらの点からみて、「于役志」は「入蜀記」「呉船録」など南宋の日記紀行文に少なからざる影響をあたえたものと思われる。現に『歐陽修文忠公文集』全百五十三巻の編纂を完了した周必大——彼もまた多くの日記を残している——の言葉によれば、歐陽修の文集は開封から浙江・福建・四川まで各地で種々のテキストが刊行され「于役志」一巻、著述に非ざると雖も、流伝して今に至るに、則ち略す可からず」という。小論では「于役志」を書き下し、適宜注釈を加え、最後に「于役志」からみた北宋の日記成立の背景について簡単に述べることにする。なおテキストは『四部叢刊本』による。

景祐三年（一〇三六年）丙子の歳、五月九日丙戌、希文は出でて饒州に知す。

戊子（五月十一日）、希文を送り、祥源の東園にて飲む。

冒頭は、范仲淹左遷の記事からはじまる。希文とは、北宋随一の名

臣とよばれた范仲淹その人の字<sup>あざな</sup>。権知開封府（開封府知事代理）であった彼は、この月の一日、孔道輔の上奏した洛陽遷都論をうけ、経済事情や都市構造さらには軍事防衛上の観点から、洛陽遷都を強く進言した。これに対し、当時の宰相呂夷簡は「迂闊にして名にのみ務め実無し」と仁宗の面前で非難した（『統資治通鑑長編』巻百十八）。范仲淹はさらに『百官図』および『帝王好尚』『選任賢能』『近名』『推委臣下』の四論をたてまつり、宰相呂夷簡の人事や政策を批判したのであるが、最終的には范仲淹側の越権行為がとがめられ、饒州（江西省波陽県）知事として出されることで決着したのであった。当時、歐陽修は洛陽の西京留守推官（景祐元年三月まで）から中央に転じ、正式には宣徳郎・試大理評事兼監察御史・鎮西軍節度掌書記・館閣校勘という官職にあり、職務としては宮中圖書の校訂や編纂に従事していた。しかし政府上層部のこうした深刻な対立とその結果である范仲淹側の敗北は、彼を先輩政治家として深く尊敬する歐陽修にとってはなほ大きな衝撃であった。「于役志」が、范仲淹左遷の記事から始まっているのが、そのことを示唆している。その上、そもそも「于役志」の「于役」とは、『詩経』王風「君子于役」にもとづく命名であり、「君子役に于き、其の期を知らず」ではじまるこの詩は、小序に「君子の役に行き、期度無し。大夫其の危難を思い、以て風す」とあるように、都の士人が、地方にでかけたまま帰らない「君子」たる友人の身を案じて呼びかけ、

同時にそれを黙認している主君を風刺したものと、と解釈されていた。君子たる友人に范仲淹を重ね合わせれば、「于役志」をつけ始めた内的動機が、まさに范仲淹流謫にあることは明白であろう。范の送別の宴をはった「祥源」とは、汴京城外東南三里の吹台の東南にある道教の寺、祥源觀をさす。北宋初期に創建され、のち天禧二年に今の名に改められ、大規模な樓閣を誇っていた。

壬辰（五月十五日）、安道は筠州に貶めらる。范仲淹の左遷が決まるや、諫官御史は誰も発言しなくなった。ただ秘書丞集賢校理の余靖（字安道）が、前日（十四日）范仲淹を弁護したが、ただちに落職、監筠州酒稅（酒稅監督官）に左遷された。筠州は江西省高安県。

甲午（五月十七日）、師魯は郢州に貶めらる。太子中允館閣校勘の尹洙（字師魯）も范仲淹の弁護にまわったが、崇信軍節度使掌書記監郢州酒稅に流謫となった。郢州は湖北省鐘祥県。ただし『長編』によれば尹洙流謫が決定されたのは、十八日で一日ずれている。尹洙は洛陽時代からの歐陽修の同僚で、早くから古文運動を唱えて彼に大きな影響をあたえた。

乙未（五月十八日）、安道東行し、送るに及ばず。余は君貺と之を追うも克はず。還りて君謨の家を過ぎ、遂に召して之を移す。公期・道滋・景純と夜飲す。

余靖（安道）は、汴河から大運河へ淮河をへて江南の配所筠州に向

かうゆえ「東行」という。君貺は王拱辰の字、彼は天聖八年の状元（科擧の首席合格者）、つまり歐陽修と同年の合格者であった。この時は太常寺に属する同知礼院にあった。彼はまた、歐陽修の三度目の妻となる薛氏——夷陵在任中の景祐四年三月に結婚——の姉妹を娶っていた。君謨は蔡襄の字。文人としてまた書家として名高い。この時は歐陽修の前任のポストである西京留守推官であった。公期は右の薛氏の従兄に当る人物。道滋は未詳。景純は郝質の字。西夏防衛に手柄をたて、のちには貝州王則の反乱を鎮圧した武人。殿前司の行門のポストにあったと推定される。

丁酉（五月二十一日）、損之とともに師魯を固子橋の西、興教寺にて送り、余は留宿す。明日、道卿・損之・公期・君貺・武平・源叔・仲輝ら皆来り会飲す。晩に乃ち帰る。余は夷陵に貶めらる。

損之は張大有の字。彼は天聖五年の登科でこの時三十八歳。はじめ隨州推官時代に胥偃（歐陽修の最初の妻——三年前の明道二年没——の父親）に見出され、この時は、著作佐郎・河南澠池県知事をへて太常博士であったと推定される。固子橋は外城北西の固子門（金耀門）の近くを流れる金水河に掛かる橋か。尹洙の流謫地は湖北郢州であるから、余靖の場合とは逆に、都の北西から船または馬により洛陽へ襄陽へ郢州へと向かうのである。道卿は葉清臣の字。のちに政策立案にすぐれた財務官僚として名をあげる。天聖二年第二位の成績で登科し、この時は権判戸部勾院。歐陽修よりやや年上の三

十七歳であった。彼はのち景祐四年十二月に、上疏して范仲淹・余靖・欧陽修らの処分の見直しと配所の改徙を進言しており、范仲淹たちに近い人物であったと思われる。武平は胡宿の字。彼も天聖二年の登科で当時四十一歳、集賢校理(あるいは館閣校勘)であった。

源叔は王洙の字。この時四十歳で史館檢討官であった。胡・王ともに欧陽修とは職場の同僚にあたる。仲輝は未詳。欧陽修は、范仲淹左遷以後、余靖が流謫となり、尹洙も罪を待つといった異常な状況になったにもかかわらず、時の諫官が何もしないのに対し、ついに非難の声をあげた。当時右司諫の地位にあった高若訥にあてた手紙「与高司諫書」は、欧陽修にしてはめずらしいほど激越な調子で、彼を徹底的に罵倒している。受け取った高はただちに上奏し、その上奏は聞き入れられ、欧陽修の処分(夷陵県令への左遷)が決定された。己亥(五月二十二日)、夜、遼卿の家を過ぎ別れを話す。遼卿は病にあり。庚子(五月二十三日)、夜、君眀の家に飲む。会する者は公期・君眀・武平・秀才范鎮なり。道滋は婦家に飲み、来らず。

遼卿は未詳。秀才とは科挙受験生をさす。范鎮(字景仁)は当時二十九歳、二年後の宝元元年に省試に首席合格。のち翰林学士に出世した。司馬光らとともに新法を強行する王安石に反対したことでも知られる。

辛丑(五月二十四日)、船を宋門とんめいに次る。夜、公期の家に至り飲む。会する者は君謨・君眀・景純・穆之。道滋は婦家に飲み、来らず。

宋門とは内城の東南、汴河大街を跨いでいる門。穆之は未詳。

壬寅(五月二十五日)、東水門を出で舟を泊めんとするも、岸を得ず。水は激しく、舟は河に横たわり幾んど敗れんとす。家人驚き走り、岸に登りて避く。遂に亭子下に泊す。損之来りて、奕棋飲酒す。暮れて乃ち帰る。

東水門も内城の東南、宋門のすぐ南。ここから汴河にのり江南へ下ることになる(長江に出るまでは先に出発した余靖と同じルート)。欧陽脩ははじめ湖北郢州に流謫となった尹洙がとった洛陽經由の陸路西回りを考えたようであるが、夏の暑さや老母の健康、馱馬の不足を考え、遠回りとなるが東から汴河へ淮河を下り揚州から長江をさかのぼるルートをとった(「与尹師魯書第一書」参照)。

癸卯(五月二十六日)、君眀・公期・道滋、先ず来りて、祥源東園の亭に登る。公期は茶を烹、道滋は鼓琴をうち、君眀は奕す。のち君謨来る。景純・穆之・武平・源叔・仲輝・損之・壽昌・天休・道卿ら皆来りて会飲す。君謨・景純・穆之・壽昌は遂に留宿す。明日、子野始めて来る。君眀・公期・道滋、復た来る。子野は家に還る。余は皆留宿す。君謨は詩を作り、道滋は方響を撃ち、穆之は琴を弾ず。秀才韓傑、河上に居りて、亦た来りて会宿す。

祥源は前出。壽昌は未詳。天休は鄭戩の字。天聖三年の進士で、当時四十五歳。太常博士・直史館・修起居注であった。なお記事中、葬裏の作った送別の詩は、「四賢一不詩」を指す。これは時の権力に屈しない「四賢」(范・余・尹・欧)を擁護し、宰相にこびる

「一不」(諫官高若訥)を風刺したもの。子野は張先の字。張遜の孫で、詞で有名な張先とは別人。天聖二年の進士。当時四十五歳であつた。おそらく秘書丞であつたと推定される。秀才韓傑は未詳。

ここでも留宿のため三日間の記事をまとめて記している。このことから逆に、日記は家族のいた舟に置かれていたと考えるのが妥当である。「于役志」では以下でもまとめ書きがあらわれるが、それらはおおむね舟から離れ相手先で留宿した場合である。

乙巳(五月二十八日)、晨興、宿する者と別れる。舟は既に行くも、武平は来り追及す。鎌を下すに至り、之に見ゆ。少頃にして乃ち去る。午、陳留に次り度廟に登る。

丙午(五月二十九日)、陳留に在る。

丁未(五月三十日)、南京に次る。明日、留守推官石介・応天推官謝鄂・右郡巡判官趙袞・曹州觀察推官蔣安石、来たりて河亭で小飲す。余は疾にして飲まず。客皆酔い以て帰る。

南京は現在の河南省商丘市。北宋は国都である東京開封府(汴京)

以外に、三つの副首都、すなわち北京大名府・西京洛陽府・南京応天府を置いていた。石介は歐陽修と同年の進士。当時三十二歳。古文家として知られる。

己酉(六月二日)、柳子に次る。

庚戌(六月三日)、宿州を過ぐ。張参と靈壁鎮に泊し、損之の園に遊ぶを約す。会たま余に客有りて宿州に住まる。参は先に発し靈壁に横し、余を

待つも至らず。乃ち行く。晩に靈壁に次る。独り損之の園に遊ぶ。舟は水道を失い、柂を敗る。

張参は未詳。ちなみに汴河、淮河の通行はほとんどが引き舟である。辛亥(六月四日)、青陽に次る。

壬子(六月五日)、泗州に至る。晩に国器とともに州廨の中にて小飲す。

癸丑(六月六日)、始めて春卿に見える。

甲寅乙卯丙辰(六月七、八、九日)、独り泗州に在り。始めて淮魚を食す。

国器・春卿は未詳。

丁巳(六月十日)、洪沢に次る。劉春卿・同年の黄孝恭と相遇う。始めて大理寺丞李淳裕を識る。洪沢の巡檢顔懷玉なる者は、錢思公の洛に在りし時の故吏なり。遂に四人の者と夜に飲み、五鼓に罷む。明日食し畢り、舟を解く。ともに飲む者と別れる。春卿は復た相送り、以て前む。晩に沙河に入り、月に乗じて夜行す。山陽に嚮う。春卿とともに聯句す。二鼓に聞下に宿る。黎明に元均来る。遂に楚州に至り、西倉に舟を泊む。始めて安道と舟中に見える。安道は会たま倉亭に飲む。始めて瓜を食す。倉北門を出で雨を看る。安道と突す。

巡檢とは広城警備官。錢思公は西京留守であつた錢惟寅(字希聖)をさす。歐陽修の洛陽推官時代の上司である。歐陽修は、その幕下の梅堯臣・尹洙などの若手官僚たちと交際し、それが彼の文学活動の出発点となつた。顔懷玉はその錢惟寅に昔仕えていた下級官吏だつたといふのである。また筠州流謫で一足早く出発していた余靖(安

道)と楚州で再会している。元均は田況の字。やはり欧陽修と同年の進士で当時三十二歳、楚州判官であった。彼はのち西夏との前線である陝西で功績をあげることになる。

庚申(六月十三日)、舟中にて小飲す。会する者は元均・春卿・安道なり。余始めて飲酒す。舟を移し城西門に構めんとするも、門は閉じ、月を泛べ以て帰る。

辛酉(六月十四日)、安道、舟を解く。別れを果たさず。春卿と倉亭にて突す。晩、春卿に別れる。

壬戌(六月十五日)、元均と倉北門の舟中にて小飲す。夜、倉亭に宿る。

癸亥(六月十六日)、夕、元均と水次に坐し納涼す。已にして大いに風雨きたる。震電暴かに至る。

乙丑(六月十八日)、隱甫及び高繼隆・焦宗慶と水陸院東亭にて小飲す。

雨を見る。始めて荷花を見る。

丙寅(六月十九日)、元均・隱甫と西倉にて飲む。

丁卯(六月二十日)、隱甫、来りて会す。倉北の偃上亭に登り納涼す。遅客至る。遂に及びて元均と舟中に小飲す。已にして大風ふき震電ふる。遂に舟中に宿る。

戊辰(六月二十一日)、余の生日なり。酒を具え、舟中にて寿を為す。

欧陽修は、真宗の景德四年(一〇〇七)のこの日の寅の刻、父親(欧陽観)の赴任先である綿州(四川省綿陽市)で誕生した。当時

父親は綿州軍事推官という下級官僚であった。のち彼が四歳の時、

父親は泰州(江蘇省泰州市)の軍事判官に在任中に亡くなる。己巳(六月二十二日)、元均と舟を北辰に泛べ、隱甫と会して小飲す。倉亭に宿す。

庚午(六月二十三日)、同年の朱公綽、京師より来自す。

辛未(六月二十四日)、子聡、寿州より来自す。夜、倉亭に飲む。留宿す。

壬申(六月二十五日)、舟を泛べ、北辰にて飲む。

癸酉(六月二十六日)、隱甫、来り飲別す。夜、元均と小飲す。倉亭に宿る。

甲戌(六月二十七日)、知州陳亜と魏公亭にて小飲す。荷花を見る。与る

者は隱甫・朱公綽なり。晩に舟を楚望亭に移す。陳從益、京師より来自し、

舟中にて余に見ゆ。始めて君謨の動静を聞く。秀才陳策、京師より来自し、

夜に楚望亭にて余に見ゆ。常州への書を作る。西倉に泊りしより、楚望に

至ること、凡そ十有七日なり。

隱甫・朱公綽・陳亜・陳從益・陳策すべて未詳。

乙亥(六月二十八日)、宝応に次る。

丙子(六月二十九日)、高郵に至る。

七月丁丑(一日)、復た子聡に見ゆ。弭節亭にて会飲す。

戊寅(七月二日)、遂に子聡と同舟し以て前む。邵伯に次る。

己卯(七月三日)、揚州に至る。秀才廖倚に遇う。夜、倚及び子聡と觀風

亭にて飲む。明日、子聡は潤州に之き、廖倚は楚州に之く。伯起、来る。

觀風亭に宿る。

辛巳(七月五日)、伯起と遡渚亭にて飲む。会する者は、集賢校理王君玉・

大理寺丞許元・太常寺太祝唐詔・祀部員外郎蘇儀甫なり。

王君玉は未詳。許元はのち范仲淹に見出され、京師の食料不足を解決したのを機に、江淮一带を管轄する発運使（高級財務官）に抜擢され、以後長期にわたり権力をふるった。歐陽修は彼のため「海陵許氏南園記」「真州東園記」を書き、さらに嘉祐二年の逝去の際には墓誌銘も作っている。蘇儀甫本名蘇紳。祀部員外郎で洪州（江西省南昌市）の知事であった。

壬午（七月六日）、儀甫来りて觀風亭にて小飲す。会する者は許元・唐詔・君玉なり。伯起は先に帰る。

癸未（七月七日）、許元と遡渚亭にて小飲す。会する者は壬午（前日）の如し。伯起は来らず。

甲申（七月八日）、君玉と寿寧寺にて飲む。寺は本は徐知誥の故第なり。李氏建国し、以て孝先寺と為す。太平興国に今の名に改む。寺は甚だ宏壮なり。画壁は尤も妙たり。老僧に問うに、云わく「周の世宗の揚州に入りし時、以て行宮と為し、尽く之を朽漫す。惟だ教藏院の玄奘取教を画く一壁、独り在りて、尤も絶筆為り」と。嘆息之を久しうす。

徐知誥は始め呉と南唐に、のち北宋に仕えた文人学者の徐鉉をさす。南唐時代に知制誥の職についたことがある。揚州の出身であった。李氏建国とは十国の一つ南唐をさす。後周の世宗は顯徳三年（九五六年）正月以降、江淮へ南征をくりかえした。玄奘取教とは唐の玄奘三蔵のインドへの取経の旅をさす。「于役志」のこの一節、『西

遊記』研究者がしばしば言及する箇所である。

乙酉（七月九日）、秀才呂有の家にて小飲す。会する者は壬午（六日）の如し。伯起は来らず。余は遂に留宿す。

丙戌（七月十日）、真州に至る。大熱にして水無し。

辛卯（七月十五日）、資福寺にて飲む。舟を溶溶亭に移す。処士謝去華が琴を援く。涼を待ち以て客舟に入る。

戊戌（七月二十二日）、客舟に入る。涵虚亭に泊まる。

庚子（七月二十四日）、江口に次る。

辛丑（七月二十五日）、長蘆に次る。

壬寅（七月二十六日）、夜、風に乗り清涼寺に次る。

癸卯（七月二十七日）、晨、江寧府に至る。

八月丙午（一日）、猶江寧に在り。

丁未（八月二日）、君績の家にて小飲す。

己酉（八月四日）、水閣にて小飲す。

庚戌（八月五日）、采石に次る。

辛亥（八月六日）、風に阻まらる。侍禁陳宗顔と飲む。

壬子（八月七日）、太平州を過ぐ。夜、風に乗りて帶星口に宿る。

癸丑（八月八日）、蕪湖繁昌を過ぐ。慈母磯に宿る。

甲寅（八月九日）、風に乗りて昼夜行く。

丙辰（八月十一日）、小姑山の神に禱る。江州に至る。

丁巳（八月十二日）、江州に在る。陳侍禁と廬山に遊ぶを約す。余病み、

医者を呼ぶも、往くを果たさず。遂に行き、郭家洲に次る。

侍禁は下級武階。陳宗顔は未詳。なお江州でこの時歐陽修が作った詩「琵琶亭」は、かつて江州司馬として左遷された白居易に自らを重ねあわせて次のように歌う。「樂天曾て此の江辺に謫され、己に天涯を嘆き涕すること泣然たり。今日始めて知る予の罪の大なるを、夷陵は此を去ること更に三千なり」。

己未（八月十四日）、郭家洲にて風に阻まらる。澧陽県令・趙師道と村市にて飲む。村人に就き羊を市い膳に供せんとするも得ず。余疾にして、江州に還り、廬山の僧を召し以て医さんと謀るも、果たさず。

庚申（八月十五日）、盤唐港に次る。

辛酉（八月十六日）、蕲陽に至る。

壬戌（八月十七日）、瞿珣の家にて小飲す。丹稜知県著作佐郎范佑・蕲春主簿郭公美に会す。

瞿珣・范佑・郭公美ともに未詳。

癸亥（八月十八日）、新治に次る。江神に禱り、大魚を得る。

甲子（八月十九日）、磁湖に至る。

乙丑（八月二十日）、猶お磁湖に在り。丁巳（八月十二日）自り余の体、佳れず。是に至りて小間たり。

丙寅（八月二十一日）、黄州に至る。

丁卯（八月二十二日）、知州夏屯田と竹楼にて飲む。興国寺火たり。余が明日社飲を為すを約するも、果たさず。夜、江澳に登る。漆磁に次る。

夏屯田とは屯田員外郎で黄州知事の夏某。社飲は土地神を祭る秋社（秋祭り）をさす。立秋後の五番目の戊の日に行なわれた。

戊辰（八月二十三日）、双柳夾に次る。

己巳（八月二十四日）、白楊夾に次る。

庚午（八月二十五日）、鄂州に至る。始めて令狐修己と相識る。令狐修己は未詳。

辛未（八月二十六日）、人を遣して黄陂に之ぎ、家兄を召さしむ。大風雨。渡江に克えずして還る。

家兄は歐陽昞をさす。黄陂は鄂州（湖北省武漢市）の北四十キロほどの所。歐陽修の本籍は江西廬陵であるが、前述の如く幼くして父を失って以来、母親とともに叔父（歐陽擘）の勤務先である随州に身を寄せそこで成長した。その随州は黄陂からさらに西北百三十キロほどの所である。

壬申（八月二十七日）、修己の家にて小飲す。遂に留宿す。明日（二十八日）、家兄来りて修己の家にて余に見ゆ。始めて酒に中り、兄の家にて睡る。

甲戌（八月二十九日）、兄の家にて飲む。

乙亥（八月三十日）、令狐の家にて飲む。夜、兄の家を過ぎ会宿する。

丙子（九月一日）、沌口に次る。

丁丑（九月二日）、昭化港に次る。夜、大風。舟は泊るを得ず。江神に禱る。



戊寅（九月三日）、穿石磯に次る。夜、大風の舟を撃ち、寝ぬるを得ず。

己卯（九月四日）、岳州に至る。夷陵の県吏、来りて接す。城外に泊る。

歐陽修の「晩に岳陽に泊まる」詩（『居士外集』卷二）の冒頭に

「臥して聞く岳陽城裏の鐘、舟を繋ぐ岳陽城下の樹」とある。

庚辰（九月五日）、舟を邵陵に仮る。

辛巳壬午（九月六～七日）、官舟に入る。

癸未（九月八日）、荆江に入る。李家洲に次る。

甲申（九月九日）、烏沙に次る。

乙酉（九月十日）、魯洲に次る。

丙戌（九月十一日）、塔子口に次る。魚を観る。五鷲・塵角・望夫の諸山を望む。

丁亥（九月十二日）、石首に次る。夜、大風。

戊子（九月十三日）、風に阻まらる。

壬辰（九月十七日）、公安の渡しに次る。

「于役志」の記事はここで終わっている。夷陵はさらに直線で百余キロほど上流にある。なお歐陽修一行はここから陸路で峽州夷陵県にむかい、十月二十六日着任。都の汴京から淮河・長江をとおり、夷陵までは五千五百余華里（ただし陸路で洛陽經由ならば千六百華里ですむが、前述の理由で回避した）。歐陽修の生涯でもっとも長い旅であった。

### へおわりに

明の王慎中が「于役志」を評して「酒肉帳簿也」（宴会の破したように、歐陽修の夷陵への旅は、行く先々で多くの土会をくりひろげており、そこに流謫にともなう深刻さはいかにも換えれば、この日記の中に歐陽修の内面の起伏を読み取るど絶望的である。それでは、一体なぜ歐陽修はこの「酒肉帳簿」のか。

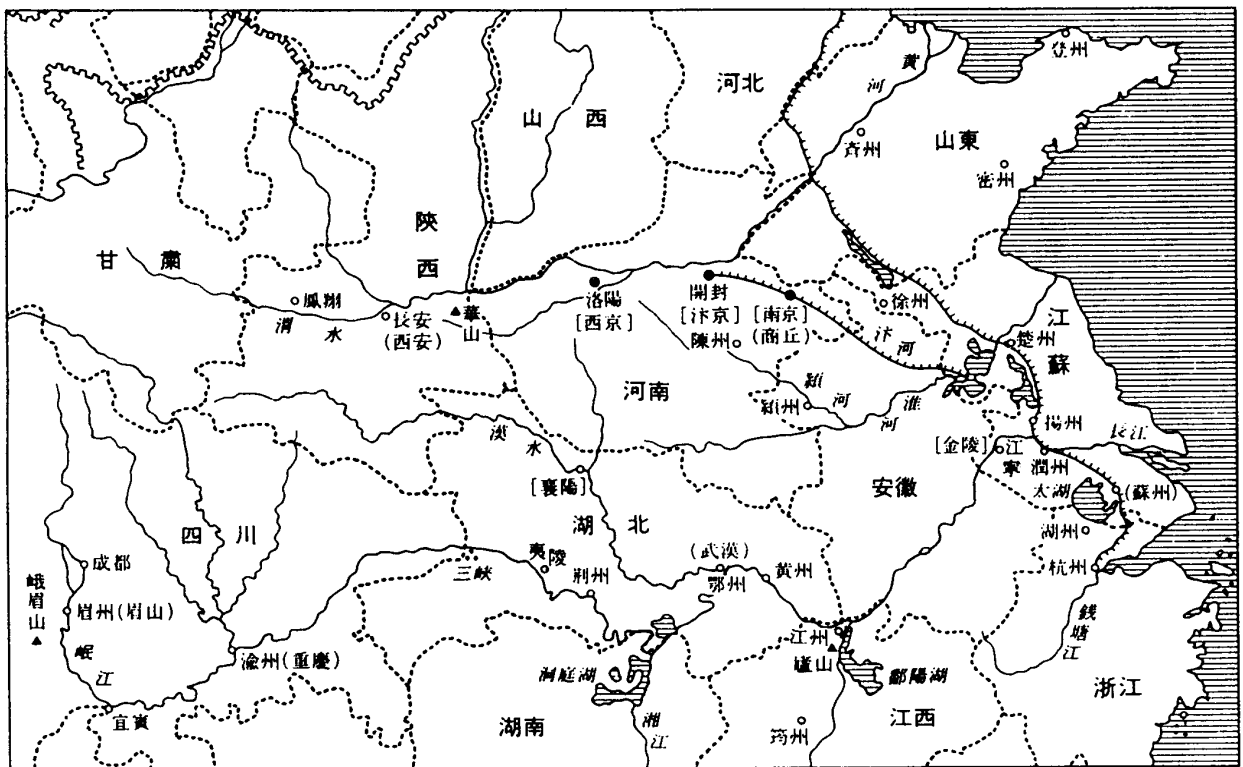
歐陽修が范仲淹左遷にからんで夷陵流謫となった衝撃が、つであることはすでに述べた。またその執筆に際して、当時李翱の文集に収められていた「来南録」がヒントとなったので、すでに指摘した。しかし、ここではこうした欧陽修個人の動向に背後にある、より広汎な文学的、社会的な状況を簡潔にあえずこの小論の結びに代えたい。

北宋の士人たちが備忘録的、家計簿的な日記をつけはじめ様々な要因があげられるが、一つは彼らが役所においても家よりも多くの実務的な処理を自らせざるをえなかった事情がありに執事を置いて一家の雑務をゆだねるといった余裕は、多にはなかったのである。蘇軾が黄州流謫の時、月はじめに四十に分け梁上に置いたと言うつつましい話（「答秦太虚書」（范仲淹の次子）が家族から奴婢下僕にいたるまで一日二食（『宋稗類鈔』卷四）などを想起すれば、彼らの家計に関する

予想以上に発達していたと思われる。

あと一つは、宋代にあつて曆子・簿曆・券曆・文曆などと称された業務日誌・出納簿・給与手形との関連である。もともと曆はその意味の一つとして日めくり・カレンダーをさすが、それらが日記という書物と密接な関係にあることは、言を待たない。曆の語が時に日記そのものをさすのも当然である。他方カレンダーは、印刷術の成立後のもっとも早い段階（唐末）で、大量生産し大量普及の対象に選ばれた。加えて、同じく印刷術に関連していえば、卷子本から冊子本へという書物の体裁の変化は、原則として日々継続してつける日記というものにきわめて適した形を提供することになったと思われる（范成大の記事冊の例）。つまり、印刷術によるカレンダーの大量普及や冊子本の登場などが、公文書としての簿曆の整備をうながしつつ、同時に日記という家庭内の私的な記録をつけることを一段と容易にさせたのではあるまいか。——なおこれについては、近く別稿で改めて論じる予定である。

(完)



山本和義作製（年表も）

( )内は現在の地名。[ ]内は宋代の別名。